

するが如きは、卑怯の行爲にして軍人の本分を傷くるもの也。

2. 一人負傷せるが爲めに他の一人が之を介護するときは、一人の負傷の爲めに二挺の銃が休むこととなり、十人の負傷者に對し二十人の銃が休む割合となる。之が爲めに味方の敗となるやも知れず。豈に一大事にあらずや。故に寧ろ進んで其復讐をなすは、反て友情の厚きものたることを肝銘せざるべからず。
3. 必らず負傷せる戦友の彈藥を受取るべし。

4. 命令なくして、負傷せる戦友の介護の爲めに後へ残り、或は之を後方へ運搬する等のことを爲すときは、逃亡罪に問はる。

六。

自己の負傷せる場合。(步操一二三)

1. 輕傷なる場合。
地形地物に掩蔽して繃帯をなし、後依然として射撃を續行す。
2. 輕傷なるも射撃をなし得ざる場合。
い、彈着點の觀測をなす。
ろ、敵狀の視察をなす。

は、銃及び彈藥を所要者に渡す。

3. 戦線に加はるに耐ふる能はざる程度の負傷

い、銃及び彈藥を所要者に渡す。

る、上官の命を待ちて徐ろに戦線より退く。

4. 綑帯場の位置を知る法。

い、傷者を運搬する擔架卒あらば、之と同行す

るを善しとす。

る、日章旗及び赤十字旗(夜間は提灯)を掲げあ

る所を探す。

(普通戦線より千米許後方に於て、森林、高地

の陰、家屋等に設けらる)

第二次

一、武器に故障を生せし場合。

1. 銃口に砂塵の入りし場合。

地形地物に遮蔽して、之が掃除をなす。

2. 豫備器具の使用を要する場合。

い、豫備器具は十人に一組の割合に有するも

の也。

(普通分隊長若くは上等兵之を有す)

る、豫備器具には遊頭、擊莖、駐螺、擊莖、擊莖發條

彈倉發條擊鍊等あり。

3. 銃器全部の取換を要する場合。

い、分隊長或は負傷せる戦友の銃器を貰ひ得る場合。

ろ、以上のものより貰ひ得ざる場合。

(着剣をなし、彈着の觀測手及び敵狀の視察

手となる)

二. 他^〇の分隊と混淆せる場合。(步操一二四)

兵卒は最寄分隊長の指揮を受け、奮闘すること所屬分隊長に於けるが如くなるべし。

三. 所屬部隊を失ふたる場合の處置。(步操一二

五)

○散兵線上に在る兵卒は、許可なくして其所屬部隊を離るゝことなきを以て所屬部隊を失ふが如きことは無し。唯斥候傳令等の歸還に際して斯かる場合に遭遇することあるのみ。然れば此課目を此處に收むるは如何かなれど、其後の處置は散兵動作に關する事なるを以て敢て、此部に挿入するも差支なかるべし。1. 其近傍に於て戦闘する部隊に合し、其將校に

届告し其命に従ふ。

2. 戦闘終れば其將校の證明書を貰ひ直に其所屬部隊に復歸す。

四. 戦闘頗る悲惨の状況に陥れる場合。(步操一

二一)

1. 勅諭の五ヶ條を唱ふべし。

2. 精氣を丹田に集め、軍人精神を振起し、從容自若として事に當り、決して逡巡すべからず。

3. 凡て疑懼退走は敗滅に陥りて、猛烈果敢なる前進は常に勝利を得べきものなることを銘

肝すべし。

五. 射撃軍紀の實地的應用及び練成。(步操一五

五)

○射撃軍紀は次の要素より成る。

1. 軍人精神の發揮。

2. 射撃に關する諸法則の嚴守。

3. 上官の命令に對する絶對的服從。

(命令遵奉動作の確實)

○之を具體的に練成するには概ね次の動作に依る。

い、敵火の下に在りて其長の命令を嚴守する動作。

ろ、確實に射撃の諸法則を實行する動作。

は、地物の利用及び發射の時機に注意する動作。

に、常に指揮官及び敵兵に留意する動作。

ほ、目標消滅するか或は射撃中止の號令ある

ときは直に射撃を中止する動作。

へ、總ての幹部を失ひ、指揮行はれざるとき

動作。

各個散兵附録

○地物利用上の注意

1 銃(或は前臂)の依托確實なりや

2 射界廣濶なりや即ち目標十分に見ゆるや否

や

3 成るべく正規の姿勢を取り得る地物を可と

す

4 成るべく低き姿勢を取り得る地物を可とす

5 誰か見ても悠暢に見ゆる姿勢を取らざるべ

からず

- 6 地物は一物にても多く利用すべし
草一本も地物なり、草一本にても身を遮蔽する効あり、
- 7 射撃を妨害するものは成るべく除去せざるべからず。(射界の清掃)
草一本も妨害をなす、彈丸は草一本に觸れても偏避(矢切)を生ずるものなり
- 8 一地物に着きたる後更に他の地物に移動せざるを得ざるか如きは拙也。地物に着かぬ以前に能く適當に且つ迅速に選擇すべし

- 9 銃口が正しく敵(正面)に向き得る地物にあらざれば價值なし、即ち銃口正しく敵に向き居らざるべからず。
- 10 銃口及び遊底内に決して土砂等を入るべからず。
- 11 前方に敵彈を跳飛して吾に危害を及ぼす如きもの(礫石等)なきを要す。
- 12 明瞭なる物體の附近にある地物は敵に好目標を呈し易し。
之が爲には後方の暗黒(森林等)なる地物を可と

す。

13 堅きものより柔きもの(瓦石よりも埋土)を撰ばざるべからず。

14 地物にのみ氣を取られて他兵との連繫を破るは不可なり。

15 地物には必らず前進準備をなし置かざるべからず。

16 攻撃の際の地物利用は、前方に前進容易ならざる障碍物(牆壁池川溝渠等)なきを要す。即ち進出容易なるを要す。

17 防禦の際の地物利用は、前方に敵の近接困難なる障碍物あるを可とす。

18 踏み固めざる砂地を利用する際には注意せざるべからず。砂地は銃口及び遊底内に砂の入り易きもの也。故に砂地に於ては銃を直接依托せずして、前臂を依托するを可とす。

19 樹木或は瓦石等の如き堅硬なる地物に銃を直接依托することは好ましからず。反動の爲めに銃を跳ね上ぐる恐れあるか故也。

20 發射毎に振動するか如き地物(細き樹木或は

束ねたる萩芒等)には銃(或は前臂)を依托すべからず。此の如き地物は單に遮蔽の効あるのみ。

○戦闘間兵卒の動作

一、問。散兵の忘れてならぬ精神は何であるか。

答。勅諭の五ヶ條殊に忠節、武勇の二精神を以て終始一貫し、十分に攻撃精神を發揚することでありませう。

二、問。散兵線に於て兵卒が常に注意して居らねばならぬものは何か。

答。敵と我指揮官とであります。

三、問。火線が喧しくても指揮官の號令を聞くことができなるときは如何するか。

答。能く將校(指揮官)の方に注目し其劔を以てせられる記號か又は其舉動に従つて進退を決めます。

四、問。戦闘間小隊長が居なくなつたら如何するか。

答。分隊長の指揮を受けます。

五、問。分隊長も居らなくなつたら如何するか。

答。私か自ら勇悍なる動作を以て他の模範

となり共同動作して戦闘します。

六

問。戦闘に當りて最も危険なる動作は如何

する事であるか。

答。敵に背を見せることでもあります。

問。其は何故か。

答。1. 敵の士氣が壯んになりて、味方の士氣

か衰へる。

2. 敵が沈着して射撃をなし味方は一發

をも射つことかたせぬ。

問。然らば汝は戦闘に敗けやうとするとき

ても退却しないのか。

答。決して致しませぬ。退却をして敵に撃ち

殺されるよりは、一人でも多くの敵を撃ち

殺して後、名譽の戦死をします。

七。問。戦闘中退却に次いで危険な動作は何か。

答。敵前で側面運動をする動作であります。

八。問。散兵は濫りに射撃をしても宜しいか。

答。濫射してはいけません。成るべく彈藥を

節約しなければなりません。

問。其れは何故なるか。

答。敵に十分接近して最も大事の時に至り、
烈しき射撃を施して敵を撃ち破らなければ
ばならぬからであります。

九、問。戦闘か味方の敗になり軍旗を敵の手に
奪はれむとするときは如何するか。

答。地下へ隠します。

問。それが發覺さるる心配のあるときは如
何するか。

答。焼き棄てます。

問。焼き棄てる道具のないときは如何する

か。

答。銃剣で自分の腹を切りそして腹の中へ
隠します。

十、問。散兵行進中銃器に對して何か注意する
ことがあるか。

答。銃口を上にし、必ず安全装置にし腰に
確つかり支へます。

十一、問。散開は何故に迅速に行はなければな
らないのか。

答。1. 早く戦闘隊形を取らなければならぬ

爲めと。

2. グズ／＼して居ると敵の彈丸を受け
る爲てあります。

十二、問。汝は何の方面の敵兵を射撃して居る
か。

答。ハイ對向する部分の敵兵を打つて居り
ます。

問。汝の對向せる部分より指二本(三十米)許
右の方に一人明瞭な目標を現はして居る
兵が在る。何故彼れを打たぬか。

答。ハイ、彼れは又彼れに對向する部分の味
方の者が打ちます。

問。汝は何故對向せる部分の兵を打つのか。
答。ハイ、成るべく味方の彈丸を敵の全線に

加へなければならぬからであります。

問。汝の對向する部分の敵は十名ばかり居
る彼の中何れを打つて居るのか。

答。ハイ、彼の中で最も明瞭な目標を現はし
て居る向つて右から三番目の兵を打つて
居ります。

問。彼れは汝の彈丸の爲めに倒れた次は何れを打つか。

答。ハイ、私に恰度正對して居る中央の兵を打ちます。

問。ソレハ何故？

答。目標の見へ工合の同じいときは自分の正對せる兵を打つのであります。

問。ソレでは汝は自分の對向して居る部分の中で最も明瞭な目標から先に打つのか。

答。ハイ、そうであります。

問。宜い。然らば汝は彼の明瞭な目標を現して居る兵を見て何か感じたところがあるか。

答。ハイ、有ります。地物の利用が下手で敵に明瞭な目標を見せると敵から餘計に射撃せられねばならぬといふことであります。

十三。問。汝の對向せる部分に三名の敵が密接して居る見へ工合は皆同じい何れを打つか。

答。中央の兵を打ちます。

問。何故？

答。過まりて偏避しても隣兵に中りますか
ら。

問。今風が右から吹いて居る。三人の中何れ
を打つか。

答。ハイ、右の兵を打ちます。

十四。問。敵の散兵の中央に機關銃が現はれた。

答。(動作を以て示す)

1. 敵の散兵の中央に機關銃が現はれま
した。(報告)

2. 機關銃を照準して射撃。

問。彼は機關銃を打つのか。

答。ハイ。

問。彼れは他の兵の對向せる部分ぢやない
か。彼は敵の左翼の兵と對向して居るじや
ないか。

答。ハイ、彼れは特に有利な目標でもあるし、
又味方へ對して大に損害を興へるもので
ありますから、對向せる部分でなくとも打
ちます。

十五。問。(援隊増加の状況を示す)

答。援隊と重なるやうな散兵に向つて射撃す。(動作)

問。汝は彼の行進中の大なる目標を現はして居る援隊を射撃するのか。

答。ハイ、目標變換はしませぬ。前から射撃して居た目標の中で彼の援隊と重なるやうな散兵を射撃すれば兩方ともに彈丸が中ります。

十六。問。(敵の散兵の一部躍進の状況を現はす) 答。銃口を其方向に向ける。(動作)

問。彼れを打つのか。

答。ハイ。

問。何故？

答。中隊の射撃区域内に彼のやうな有利な目標が現はれたときには自分の對向せる部分でなくても射撃します。

十七。戰團間敵に向つて前進中嚴禁してあることがあるか。

答。あります。如何に猛火の下と雖も命令なくしては決して止まつてはならぬといふこと

とであります。

十八、問。一つの地物あらば何人でも其に據りて宜しいか。

答。イケマセン。散兵は連繋を取りて歩かねばなりませんから他のもの、妨害をしたり或は又餘り間隔をつめたりしては宜しくありません。

問。他のもの、妨害にならぬときは差支ないか。

答。左様な場合には差支ありません。

十九、問。斥候等に出て、歸り來りしとき等若し己が所屬隊を見失ひたるときは如何するか。

答。近所の隊に加はり、其隊長に届告して其指揮を受け、戦闘終りて後其隊長の證明を貰つて舊隊に歸ります。

(秋季機動演習に於ても所屬隊を失ふ場合少からず、其際には必らず此證明書を
得て歸るやうにしたきもの也)

二十、問。敵の火力が熾んであつて味方の死傷

が非常に多く實に悲惨な状況に陥つた。如何する？

答。ハイ、勅諭の五ヶ條を唱へ下腹に力を入れ、益々攻撃精神を振起して、ピリツとも致しませぬ。

問。ケレドモ戦闘は益々激烈となり、状況は益々悲惨となりて、何となく失心喪氣（トホッ）した場合は如何する？

答。ハイ、將校の顔を見ます。將校が居られなかつたら、分隊長の顔を見ます。之も居られ

なかつたら勇悍なる他の兵卒の動作に見倣つて協同動作をします。而し私は如何んな場合でも失心喪氣するやうなことがないと思つて居ります。

問。それは又何故？

答。ハイ、私は畏くも大元帥陛下の御稜威と天地神明の御加護とを受けて居る身でありますのと、又私の精神は岩よりも堅くありますから。

廿一、問。汝の戦友が重傷を負ひ、苦悶をして居

問、如何する？

答、夕不彈丸を借せ仇を打つて遣るぞ……

(動作で示す)

問、亦抱してやらぬのか。

答、ハイ、命令なくしては介抱を致しませぬ。構はず戦闘に従事します。

問、其は餘り無情でないか。

答、ハイ、無情の様でありませぬが、一人の負傷した爲めに三挺の銃が休んで仕なりませぬ。

問、如何する？

答、ハイ、逃亡罪に問はれます。

問、戦闘中汝は重傷を受け腹部貫通射撃することゝも運動することゝも叶はぬときは如何する？

答、(動作を以て現はす)

(分隊長に對し)分隊長殿、本多政春腹部に負傷して射撃も運動もできません。

問、命令なくして戦友の介抱をして後へ残り又は故なく戦線を脱れるものは何か？

答、罰でも受けるか。

問、如何する？

答、(動作を以て現はす)

問、戦闘中汝は重傷を受け腹部貫通射撃することゝも運動することゝも叶はぬときは如何する？

答、(動作を以て現はす)

問、如何する？

答、(動作を以て現はす)

(分隊長に對し)分隊長殿、本多政春腹部に負傷して射撃も運動もできません。

問、如何する？

答、(動作を以て現はす)

(戦友に對し)誰か彈丸のなほものはなにか。
(乃公の彈丸を持つて行つて仇を打つて呉

答。...

廿四. 問. 輕傷なるときは如何する?

答. 傷の個所は自分で繃帶を施し出来る限

廿三. 中は射撃をして、戦友と共に戦闘を續けま

答. ...

問. 汝の脚に負傷した。

答. 繃帶をして後射撃を續けます。

廿二. (動作を以て現はす)

問. 右手を負傷して射撃はできぬ。

問. 如何する?

答. 敵方の監視及び戦友の彈着點を見、又彈

丸の分配をしてやります。(動作を以て示

答. ...)

廿五. 問. 汝は可成重い傷を受けた爲めに、分隊

廿六. 長は繃帶場へ行けと言つた。如何する?

答. 繃帶所を探ねて行きます。

問. 繃帶所はドンナ所にあるか。

答. ... 千米許後方の家屋か森林か丘阜の

答。ある所七赤十字の旗(夜は赤十字の印)の提灯を見當にして行きます。

問。又機業に附いて行けば最も能く分ります。

廿六。問。戦闘中汝の銃の撃鎖を破損して射撃

廿五。問。射撃の如何なるか。

答。分隊長殿酒井五郎の銃の撃鎖が破損し

また及、撃鎖器具の物を取換へて下さい。

答。動作を以て示す。

問。撃鎖器具は何人に一組持つて居るか。

答。各々十人に一組持つて居ります。

廿八。問。豫備器具とは何なるか。

答。バネ、遊頭、撃莖、彈倉、發條、撃莖、發條、撃鎖、撃

莖、駐螺等であります。

廿七。問。敵が右翼へ伍間に増加した。

廿八。答。敵兵右翼に伍間増加(報告)。

問。敵兵左翼に延伸増加した。

答。敵兵左翼に延伸増加(報告)。

問。敵は前進を起した。

答。敵兵前進(報告)。

問。照尺は敵の前進中に改装するか停止し

てからするか。散兵は前進中、敵の射撃を避けて、

答。停止してからします。

問。何故？

答。敵の前進中は目標が大きい故其の間に一發にても多く射たねばなりません。

廿八、問。味方の彈丸が皆敵の後方へ落つるのを見たら、

答。一分隊長殿、味方の彈丸は皆敵の後方へ落ちるやうてあります。

廿九、問。散兵は敵にこれ程まで接近してから

着劍するか。

答。三百米位に近づいたなら着劍します。

三十、問。汝等は彈丸を皆使つて終つた(指揮官なし)

答。着劍して突撃(動作を以て示す)

卅一、問。汝等は敵に圍まれた。如何する？

答。獅子の荒れたるが如くに突進して一方を切り破ります。

卅二、問。戰爭中敵の彈丸が非常に來る味方の死傷が非常に多い。身體は益々疲勞を感じ

て来る。モウ辛抱しきれない程に辛い。如何する？

答。戦は最後の五分間といふことがありませんから、味方が辛いだけ、敵も辛いのであります。ます此處が相方の氣根競べだと思ひ、益々勇猛心と忍耐心とを揮つて死を決して戦ひます。

卅三 問。如何に激烈なる戦の中ても決して忘れてならぬことは何であるか。

答。名譽といふことであります。

問。何故？

答。名譽は軍人の生命であります。名譽といふことさへ忘れずに居れば如何なる酷いことや恐ろしい有様を見ても決して心を奪はれたり遅れを取りたりするやうなことがないからであります。

各個散兵教練終

明治四十三年十二月十七日印刷
同 年十二月廿三日發行

著 者 洛 陽 生

發 行 者 東 京 市 四 谷 區 片 町 十 二 番 地
高 橋 靜 虎

印 刷 者 東 京 市 神 田 區 美 土 代 町 二 丁 目 一 番 地
池 田 勝 四 郎

印 刷 所 東 京 市 神 田 區 美 土 代 町 二 丁 目 一 番 地
立 教 社

發 行 所 東 京 市 四 谷 區 片 町 十 二 番 地
軍 事 教 育 會

電 話 國 番 町 六 九 四 番
振 替 貯 金 口 徑 東 京 四 〇 五 四 番

士官學校、中央幼年學校合譯

◎四將校の本分及義務

實費金貳拾五錢
郵税金 四 錢

右は獨逸將校の處身及處生の方法を丁寧懇篤に細論詳述したるものにして眞に吾人の錦囊なりと云ふも溢美に非ざるなり今回實費を以て會友（軍事新報購讀者は會友に準ずるを得）の需めに應ずること、爲せり

目 次 摘 要

第一章 將校の本分

第一、名譽○第二、義務○第三、軍事道德○第四、宗教○第五、處世○第六、愛國友愛心○第七、教育○第八、行動○第九、他に對する將校の行動實際の選擇○第十、料理店及び將校集會所の出入○第十一、批評○第十二、服裝○第十三、私闘及決闘○第十四、武器使用○第十五、國家に於ける將校の地位

第二章 將校の義務

第一、體育○第二、研究、教育○第三、性格の養成及び性情の抑制○第四、軍組第五、上官の威嚴○第六、教官及び教育者并に勤務に服する將校○第七、處罰の適用○第八、職權の濫用部下の虐待○第九、賞與譴責の適用○第十、將官の

重要なる事項 一、命令の實行 二、誇學 三、人物の鑑識 四、勤務に於ける謹嚴勤務外に於ける親密 五、部下に對する注意 〇第十一、判士たる將校 〇第十二、階級の關係に於ける事項 〇第十三、豫後備役將校の演習 〇第十四、個人的性格 一、意力 二、勇氣勇敢大膽及び沈着 三、決心及び決意力 四、敢爲 五、方正 六、獨立心 七、正直 八、身分に對する熱情 九、善意 十、愛國心 〇第十五、野外に於ける態度 〇結論

士官學校譯(一二卷は森軍醫監譯)

◎再版大戦學理

(全八冊)

實費金貳圓四拾錢
小包料金參拾錢

(本書の評論)

大戦學理は軍事哲學者の泰斗普國陸軍大將 Von Clausewitz の遺稿なり人若し「獨逸」に於て兵書の首位を占むる大論は之問はば識者必ず此の書を推さん「獨逸」の軍事が今日の隆運に至りしは正に此の書の功なり。更に一步を進めて言へば、世界の軍事の進歩は此大將の力止に其の遠因を爲せしと云ふも可なり。是れ爾ま「獨逸」人の私見にあらず、望遠鏡者の公論なり。今本書の價值を明にせ

るが爲め「クロゼウツ」に對する「二」の評論を引く可し。由來「佛蘭西」人は獨逸人を驚ふ心あるが故に、容易に「獨逸」人の説を悦ばざるの傾あり。故に「クロゼウツ」の論を知るには佛人の批評に若くものなからん「佛」國陸軍中將 Dierion 氏は近代有数の論者なり中將「クロゼウツ」を評して曰く「那翁が千八百十二年以前に戦勝を得たる所以の原理及連合軍が同年以降千八百十五年に到るの間に戦勝を得たる所以の原理は皆單簡なりと雖も、之より生ぜし機變は千狀萬態究りなし世人は空しく此大戦の跡を觀て此原理を覺らざりしに「クロゼウツ」の慧眼遂に善く之を發見せり」と、又曰く「嗚呼若し我が國の團隊長千八百七十年以前に「クロゼウツ」の説を一考したらんには、豈に又當年の如くに戦略を過たんや。吾人過去の非を覺り將來の準備を修めんを欲せば「クロゼウツ」の論を讀まざる可からず」と。傳へ聞く、佛國陸軍大學校の教官騎兵中佐某氏の輓近學生に示せし説あり、其の説に曰く「頭を回らして往時を想へば革命戦興りて全「歐」大戦場を爲り、爾後二十年の間戦殆ど息む時なし。爰後帝國那翁帝政の時「倒れて大戦止み各邦力痛みて萬民太平の樂を懷へり。爰に於て人心自然の反動を生じ、世に所謂の小説尊崇なる文運隆盛の時代を來せり。今にして之を想へば火災鎮りて夜益々闇く、兵術跡を世に絶ちて軍事思想

意味しよ云ふ可し。此の時に當り炎火既に消滅して而して火氣尙灰下に存せしものは獨り「獨逸」のみ。軍事思想は此敗餘の國に萌芽して遂に近世第一流の軍事哲學者を出せり、其の名を Von Clausewitz を稱す云々。然して此の二説は敢て「佛」國に於て僻説と見らるゝものにあらず、是れ正に同國に於る識者間の輿論なり。萬國の軍人が「クローゼウイツ」に對する意向推して知る可し。然るに「クローゼウイツ」の立論を見るに凡一事を論ずる毎に必ず之を各方面より鑑察して遠く哲理を採り、深く當否利害を究めて遂に其の眞理を論出す。夫れ眞理は人の思想を刺撃して判斷の明を發せしむ。人判斷に明なれば必ず害を去て利に就く、進歩の大本は即ち此の利害の取捨に在ること固より論なし。是に由て之を見れば「獨逸」に於る軍事の今日あるは其の本因正に「クローゼウイツ」の力ならざるを得んや。

陸軍歩兵大佐 和田音五郎氏著

◎四版應用射擊 定價金二十五錢 郵税金六錢

◎列國射擊教育比較 實費金參拾錢 郵税金八錢

日本參謀本部譯

「ア、リヤビ」
「ニン」著
日露戦争に基ける小部隊の戦闘法及前哨勤務

定價金 八錢 郵税金 二錢

第一部	戰團	一、中隊の戰團法	二、射擊戰團及彈藥の補充	三、大隊の戰團法	四、銃劍、機關銃、方匙及夜間の行動	五、退却の準備
第二部	前哨勤務	一、前哨部隊	二、前哨中隊	三、前哨司令官、前哨本隊の勤務連絡	四、前哨中隊の勤務	五、敵襲に際する動作
		六、前哨の撤收及近距離警戒				

右は日露戦役に従事したる露國歩兵大尉の著作なり

陸軍士官學校譯

◎三版 戰術上の決心及命令

定價金四拾錢 郵税金 六錢

右は獨逸陸軍大學校の教授法に依りて講述したるものなり

陸軍歩兵大佐 松川敏胤氏著

◎七版 支隊の戰術實施

定價金五拾錢 郵税金 八錢

◎幹部手簿

定價金拾錢(半年分) 郵税金貳錢(携帶式)

右は今般士官手簿及班長手簿を机上式と爲したるを以て發行したるものにして尙ほ日本の演習計畫を爲ししめんとするに在り

故陸軍歩兵中佐 橋岡太氏著

◎五版 經驗餘錄

定價金貳拾錢 郵税金 四錢

目次

第一章 總說

銃砲火の進歩と教練 ○各個教練 ○中隊教練 ○大隊教練 ○射擊教育 ○地物利用器械體操と銃劍術 ○應用體操野外教練 ○夜間教育 ○銃砲火の進歩と駈歩

第二章 總說

無烟火藥と兵卒 ○無烟火藥と斥候 ○無烟火藥と工作 ○無烟火藥と陸敵地 ○森林内の運動隊形 ○森林内連絡の保持 ○森林内の搜索 ○林空地の通過 ○森林の追撃

第三章 總說

將校の徳義 ○中隊長 ○大隊長 ○連繫 ○教育眼 ○檢閲眼 ○紀念日 ○演習眼 ○習慣 ○勤務者の教育 ○兵卒普通學の教育 ○附錄第一老婆心 ○第二老婆心

陸軍少將 山口圭藏氏 陸軍少將 澁谷在明氏
 陸軍歩兵大佐 松川敏胤氏 陸軍砲兵大佐 星野金吾氏
 陸軍歩兵中佐 松石安治氏 陸軍歩兵中佐 明石元二郎氏
 陸軍歩兵少佐 橋本勝太郎氏

◎再戰術講究錄 第一集 定價金參拾錢 郵税金六錢

陸軍少將 東條英教氏 陸軍少將 澁谷在明氏
 陸軍歩兵大佐 松川敏胤氏 陸軍歩兵大佐 仁田原重行氏
 陸軍砲兵大佐 星野金吾氏 陸軍工兵大佐 阿部貞次郎氏
 陸軍砲兵少佐 有田恕氏

◎再戰術講究錄 第二集 定價金參拾錢 郵税金六錢

故陸軍歩兵中佐 佐久間金吾氏著

◎訂正部隊教練 定價金貳拾錢 郵税金六錢

故陸軍歩兵中佐 橋周太氏著

◎新版新兵教育 定價金二八錢 郵税金二錢

獨逸歩兵中佐 エルフオンブリーゼン氏著

陸軍歩兵中佐 野澤悌吾氏譯

◎三歩兵戰鬪展開 定價金參拾錢 郵税金六錢

此書固き「歩兵中隊、大隊、聯隊及旅團の戰術展開問題」と名け諸種の狀況を想定して問題を設くる約百餘而して一一之れか答解を掲げて實施の方法を示し數十の圖を加へて讀者の了解に便にし粗より細に入り簡より繁に移り特に歩兵の最大單位たる旅團の展開を詳述し以て歩兵操典第二部の應用を指導するに供す蓋し初級將校の好伴侶たるを得へし學者若し操典と對照して仔細に之を研究し更に之を野外に移して其活用を講せば得る所必ず多大なるべし此書既に操典の應用を目的とす從て新奇の學說を應用したるの形跡なきは勿論防禦及び攻撃に方て各部隊の取るべき正面幅を命じたるの一事は蓋し戰鬪間不知不識正面過廣と爲り遂に各部薄弱に陥るの通弊を矯んと欲する著者の微意に出でたるが如し

◎五歩兵戰術

(小隊中隊の部)

定價金貳拾錢
郵税金四錢

右は初級幹部の爲めに新報上に於て研究したる歩兵戰術を蒐集したる物なり

目次

尖兵の區分法○方四百米突森林の搜索法○大なる閉鎖地の通過法○前兵中隊長の命令○側衛長の處置側衛長の決心○小哨長の歩哨配備法○小隊長の射撃指揮法○散兵射擊姿勢の利害○援隊の位置、隊形行進法○援隊の増加○中隊長下馬の時機○火戰指揮に於ける中、小隊長の利害○戰闘斥候の使用法○中隊長の彈藥補充

騎兵實施學校校長陸軍騎兵大佐 秋山好古氏 閱
同戰術科 長陸軍騎兵少佐 河村秀一氏 著

◎再版騎兵戰術論

定價金貳拾錢
郵税金四錢

右は騎兵實施學校に於て學生の爲めに著作せられたるものにして論旨明快意義整然たり本會其甚だ有益なるを認め特に諸君の爲め同好の士に頒布することとせり

獨逸陸軍少將 G. V. KLEIST氏 著

日本陸軍歩兵少佐 野澤 悌 吾氏 譯

◎搜索勤務

目次

第一章 騎兵の戰術任務に關する歴史の概要

第二章 戰術任務の解説但し搜索の一語を以て之を總括し得搜索は高級指揮官に與ふるに次の三件を以てする事を得
イ、決心の基礎
ロ、警戒及隱蔽
ハ、運動の自由並に先制

第三章 搜索に任すべき者は將校斥候なること及戰例に依て其報告の効用を指示す

第四章 任務實行

第五章 報告の内容及其形式

第六章 報告送致

終 論

故陸軍歩兵中佐 橘周太氏著

◎六版 歩兵夜間教育

定價金 貳拾 錢
郵税金 錢

目次

- 總論
- 第一 着裝法、教育
- 第二 視力の養成、教育
- 第三 聴力の養成、教育
- 第四 靜肅行進、教育
- 第五 不齊地行進、教育
- 第六 方位の測知及點火法、教育
- 第七 射撃、教育
- 第八 銃劍術、教育
- 第九 工作、教育
- 第十 連絡兵及揚令卒、教育
- 第十一 部隊の運動、教育
- 第十二 部隊の射撃、教育
- 第十三 部隊工作、教育
- 第十四 部隊の突撃、教育
- 第十五 歩哨、教育
- 第十六 斥候、教育
- 第十七 夜行軍、教育
- 第十八 警戒及搜索方法、教育
- 第十九 前哨、教育
- 第二十 夜戦、教育
- 教育に關する一斑の注意
- 結論

伊東元帥寺内大將肝付中將小笠原子爵校閱
 伊崎 少佐 横井 編修 校訂
 軍事教育會理事陸軍歩兵大尉高橋靜虎編纂

◎訂正 軍人讀本 卷ノ一

定價金拾貳錢 郵税金四錢

目次

- 勅諭五ヶ條○數字○算用數字○君が代○皇御國○大日本○入營の初父母に呈する文○勤勉○金剛石御歌○入營の初友人に送る文○上官○古參○同僚○寒中交に呈する文○國體○擇友の御歌○友人より送られたる手紙に答る文○神武天皇○忠君○忠孝一致○楠氏の忠孝○大祭祝○新年の賀狀○軍人○戰時の忠節平時の忠節○禮節の話○武勇の話○信義の話○質素の話○誠○先生に送る文○陸海軍○軍隊○軍組の話○軍艦○水雷艇○軍旗○軍人の龜鑑

野津元帥伊東元帥寺内大將肝付中將小笠原子爵校閱
伊崎少佐横井編修校訂
軍事教育會理事 陸軍歩兵大尉高橋靜虎著

◎七軍人讀本 卷ノ二

定價金拾貳錢 郵税金四錢

目次

○世界の勢○國土の價值○暑中見舞の文○練兵○軍人の意氣○新兵の入營を祝する文○禮儀の話○服従○誠實○在郷入營兵に贈る文○新兵の入隊○困苦缺乏○恐怖の心あるべからず○海外より友に贈る文○謙遜○倫敦より友人に寄する文○戦友○器械體操○職務○大和魂○大勇○帝國の軍人○協同一致○自尊自重○傳令の一○傳令の二○斥候の一○斥候の二○歩哨の一○歩哨の二○戰陣の一○戰陣の二○元寇

◎五軍人讀本 卷ノ三 定價金拾貳錢 郵税金四錢

目次

○陛下の御盛徳○國家強弱の別因○各兵科の性能○軍人と國家○軍人は何が故に名譽なるか○古兵○友人に出戦を告ぐる文○靖國神社○戦地より友人に送る文○酒の害○改過○父母に除隊を報する文○歸郷後の軍人○出師準備○病氣見舞の文○儉約○經濟○分業の利○職業に貴賤なし○全力を注げ○精神一到○政治○法律○婚禮を祝する文○服従と國民○交際○信用○足るを知ること○率先躬行○標本的國民○滿洲旅行の記

◎九精神教育談 第一集 定價金拾錢 郵税金貳錢

目次摘要

○質素寡言 海軍大將子爵伊東祐亨 ○軍人中の軍人の沈着 陸軍少將佐藤正○死に至る迄手を放さず 陸軍中將男爵岡澤精○服従 陸軍砲兵大佐村田惇○忠君愛國 子爵長岡護美○改北白川宮殿下○大和魂 陸軍歩兵少佐堀内文次郎○使命を全うす 陸軍中將男爵川村景明○威仁親王殿下の御苦學 鐵櫻生○沈着○病軀○斃而已 故陸軍少將武田秀山○軍紀 陸軍歩兵大尉栗田直八郎

◎七精神教育談

第二集

定價金 貳拾錢
郵税金 貳錢

目次摘要

○餓るし食はず 陸軍中將男爵 岡澤精○服従 陸軍歩兵大佐 南部辰丙○
 戦友 陸軍歩兵大佐 松川敏胤○軍人の模範 故陸軍少將 武田秀山○砲火
 能く敵の鬚鬚を燃せ 海軍大將子爵 伊東祐亨○精神一到 陸軍歩兵大佐
 香川宮太郎○臨終手綱を握る 陸軍輜重兵大佐 奥村元信○大和魂○額死吹
 奏喇叭手木口小平 陸軍歩兵少佐 堀内文次郎○美名を負つて職務に銘る
 陸軍少將 秋山好古○軍旗の擁護者 陸軍歩兵中佐 松石安治

◎再精神教育談

第三集

定價金 拾錢
郵税金 貳錢

○實行 海軍大將 伊東祐亨○精神教育私見 泉誠生○志操養成に就く 歩兵
 少佐 堀内文次郎○大和魂の歌 砲兵中尉 佐藤清勝○任務を遂ぐる迄死せ
 ず 陸軍中將 岡澤精○兵本命を守りて蜜柑を受けず 歩兵中佐 岡有臣○
 身は死すとも魂は死せず 歩兵中佐 奥山義章○故海軍少佐坂本赤城艦長の
 奮戦 海軍少佐 子爵小笠原長生○模範的國民 陸軍中將 寺内正毅○國民
 と軍隊 陸軍中將 中村維次郎

◎三精神教育談

第四集

定價金 廿五錢
郵税金 四錢

目次摘要

○眞面目 海軍大將子爵 伊東祐亨○秩序の復活 陸軍中將男爵 山口素臣
 ○軍人の龜鑑 陸軍歩兵大佐 兒玉恕忠○兵卒死に臨んで司令官を思ふ 海
 軍少佐子爵 小笠原長生○進取の氣象 陸軍大將伯爵 野津道貫○大活砲臺
 の先登戦死者前川清市氏 海軍大尉 白石葦江○節儉なる兵卒 陸軍歩兵大
 尉 遠山景徳○忠勇なる軍人温良なる民 陸軍歩兵中佐 井上正永○富有な
 る父兄に圖る 陸軍歩兵大尉 淺田敢○後の提督尊旗少年ホブソン 海軍少
 將 肝付兼行○武士道 正五位 中田憲信○武勇 臺灣派遣の模範兵(歩兵第
 十聯隊小寺千代丸)

◎精神教育談

第五集

定價 金廿五錢
郵稅 金四錢

目次摘要

◎後の提督兼旗少甲のホブソ
伊東元帥◎田隊と國體◎武士道 肝付中將◎良兵孝子井上中佐◎禮儀 伯爵
達すべし 侯爵 野津元帥◎故谷村計介氏 伯爵 乃木大將◎在郷軍人美談
伊東祐直◎忠勇剛膽騎兵第五聯隊◎英將カペル子爵 小笠原中佐◎兵卒の模範
遠山景嶽◎北京朝陽門の先登者 歩兵第四十一聯隊◎晩成 大越中佐◎
大和魂 備後三原池田由己正◎大藏少將の話英吉利人の正直英吉利に於ける
社會の制裁英吉利人の公德◎陸軍看護手武波柳三子爵岡澤大將

◎精神教育談

第六集

定價 金貳拾五錢
郵稅 金四錢

目次摘要

◎嚴に秩序を守るべし 陸軍大將子爵 寺内正毅◎青年諸氏に告ぐ 元帥侯爵 野津道貫◎職務に忠實なる水兵 海軍中佐子爵 小笠原長生◎大に劍道教育を振起すべし 元帥伯爵 伊東祐亨◎河武的模範村 第十一師團司令部◎精神修養の方法 増田天民◎感心なる兵士 歩兵第六聯隊◎忠孝 致の精神◎砂川一孝の行状◎姫路隊司令部 大久保猶平◎嗚呼橋少佐侃堂生◎吉賀上等兵の勇戦奮闘 兵第五聯隊

三樂居士著

◎三樂叢談

第一編

定價 金參拾錢
郵稅 金六錢

目次

第一席 三世相 推し
第二席 牛醉漢
第三席 お玩弄物の刀の鏢
第四席 眼と心 第六席 學校教育と世の中
第七席 権力の弊 第八席 お愛さんの旦那 第九席 鳳
第十席 運命

本書は某中將か青年者の精神修養の爲めに軍事新報及士友に寄せられたるものなり卑俗の内に眞理を語り滑稽の間に常規を説き其該博なる智識と豊富なる資料とは滾々として盡きざるものあり今回諸君の要望に依り茲に纏めて其第一編を發行することと爲せり

◎再班長手簿

定價 金參拾錢
郵稅 金八錢

右は給養班長をして良好なる成績を擧げしめ且つ給養班長をして發達進歩せしめんとするに在りて實に左の廿三表を有す若し中隊長若しくは中隊附士官にして適當の時機に於て時々之を點檢せらるゝあらは軍隊の向上に資する決して尠少

- 七 精神教育
- 九 動物電氣
- 十一 教育の秘訣
- 十三 教育は愛本主義
- 十五 精神教育の中心點
- 十七 教ふる者は又受身の位置に
- 十八 頭腦は統一の府也
- 十九 藥は病に應ず
- 二十 果斷力の養成
- 廿二 服従心の養成
- 廿四 天職を知るは急務也
- 廿六 小々輕んぜざるは大き成すの本也
- 廿八 禮義は武士道の花也
- 卅二 武器の尊重
- 卅四 射撃術の振興
- 卅六 神社佛閣に對するの禮
- 卅八 過失に對する同情
- 四十 活動には慰安
- 八 模範的教育
- 十 吾徒の希望
- 十二 新兵の取扱
- 十四 和樂は強兵
- 十六 精神教育の基礎
- 十七 立て研究すべし
- 十九 教育は愛憎あるべからず
- 廿一 自信力
- 廿三 軍紀の嚴守
- 廿五 協同動作の觀念
- 廿七 名譽心の尊重
- 廿九 忍耐は成功の母也
- 卅一 敬神
- 卅三 官給品の尊重
- 卅五 銃劍術の獎勵
- 卅七 男兒宜しく清廉なるべし
- 卅九 助教助手の言動
- 四十一 教ふるは半ば學ぶ也

第二 形而下(學科、術科)の教育

一 各個教練の大本

二 教育には興味を要す

- 三 教育は啓蒙的ならざるべからず
- 四 自力の教育の必要
- 六 目的の説明を怠る勿れ
- 八 休憩中の戒
- 十 眼より入る教育
- 十二 區隊の隊形及位置
- 十四 號令の約束
- 十六 助教助手の言行
- 十八 助教助手の教育計畫
- 二十 深呼吸の効用
- 廿二 號令に對する注意心
- 廿四 學科教授
- 廿六 學科と教練との連繫
- 廿八 睡眠不足
- 三十 答解則動作の觀念
- 卅二 快活なる動作
- 卅四 入浴の世話
- 卅六 軍歌
- 卅八 些細の注意
- 四十 助教の教育日誌
- 五 教育の齊一、進歩の連繫
- 七 服裝検査及顔色の點檢
- 九 整列は迅速靜肅
- 十一 體操の効用及注意
- 十三 復唱
- 十五 修正眼の養成
- 十七 部分的な漸進的教育
- 十九 口と眼と下腹の力
- 廿一 番號の尊重
- 廿三 夜外演習間助手の任務
- 廿五 一時に多量の食物を與ふ可らず
- 廿七 武器被服の手入法
- 廿九 讀書と習字との長習慣
- 卅一 助教助手の責任
- 卅三 受診を遠慮する勿れ
- 卅五 厠園に於ける動作
- 卅七 班内の整頓及び掃除
- 卅九 新兵の希望
- 四十一 時間効力的教育を排す

第二 結 論

軍國一覽圖

（縦三尺六寸
横貳尺六寸
七色刷）

定價金拾五錢
郵税金貳錢

右は大陸と我國との關係軍隊の所在地師管區海軍區等一目の下に明瞭なるものあるを以て極めて有益なるべし

報徳端書

一枚金貳錢二十枚毎
に郵税貳錢目下第一
より第四まで發行

- 第一 二宮尊徳草鞋を造るの圖
 - 第二 水垢離を取り神に祈るの圖
 - 第三 人足に草鞋を預つるの圖
 - 第四 村田醫師藥禮を拒むの圖
- 右は奉書紙の木版摺なり

精神の第二、練兵場の各個教練

一部定價金貳拾五錢

郵税金四錢

目次

- 自序
 - 緒言
 - 第一、要則
 - 一、軍人精神
 - 二、軍紀
 - 第二、徒手教練
 - 一、不動の姿勢
- 形の上の不動の姿勢
- 一、兩眼を十分に刮開すべし
 - 二、口を閉ぢて鼻より呼吸すべし
 - 三、兩踵を一線上に揃ふべし
 - 四、兩足は約六十度に開くべし

- 五、兩膝は凝らさずして伸すべし
 - 六、上體を正しく腰の上に落ち着けざるべからず
 - 七、上體は少しく前方に傾くべし
 - 八、兩肩を稍後ろに引き一様に之を下ぐべし
 - 九、兩臂は自然に垂下すべし
 - 十、掌を股に接し指を軽く伸して之を並べ、中指を袴の縫目に當つべし
 - 十一、頭を眞直にし頭を正しく保つべし
 - 十二、下腹部(臍下丹田)の力を抜くべからず
 - 十三、呼吸は細緩にすべし、塵念にすべからず
- 二、「休メ」の姿勢
- 一、「不動ノ姿勢」より「休メ」
 - 二、「休メ」より「不動ノ姿勢」
- 三、右(左)向、半右(左)向及び後向
- 四、行進
- 速歩
- 歩調止メ
- 分隊止メ

足 踏

速歩間の右(左)向及後向

駈歩

駈歩間の諸動作

駈歩より速歩

駈歩より停止

五、敬禮

敬禮の嚴格を要する所以

舉手注目の敬禮

室内の敬禮

第三、執銃教練

- 一、武器の大切なる所以
- 二、立銃に於ける不動の姿勢
- 三、立銃に於ける休憩
- 四、右(左)向、半右(左)向及び後向
- 五、立銃より擔銃及び擔銃より立銃
- 六、着劍及び脱劍
- 七、彈藥の裝填及び抽出

261
745

結

- 八、射撃
- 九、執銃行進
- 十、執銃敬禮
- 一、捧銃
- 二、頭右(左)
- 三、目迎目送
- 四、停止間下士兵卒に對する敬禮
- 五、行進間の敬禮
- 六、各個分列式
- 十一、各個整頓
- 十二、突撃
- 一、突撃の性能及び快味
- 二、火戦と突撃戦との關係
- 三、列國の突撃觀
- 四、日本軍の突撃と突撃精神
- 五、突撃に對する皇國軍人の觀念
- 六、突撃の威力を強大ならしむる方法

論

